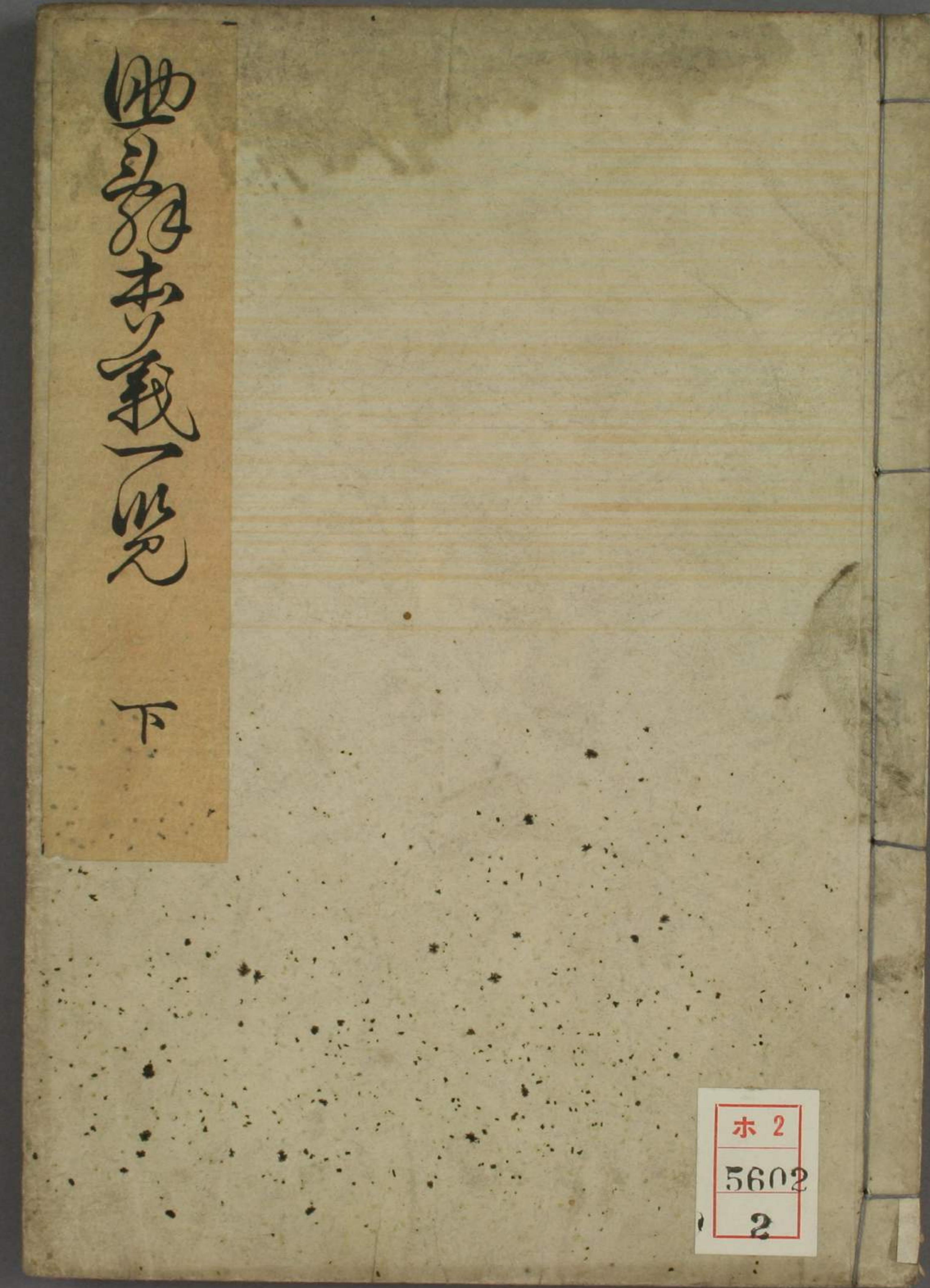


**KODAK Color Control Patchnes** © The Tiffen Company, 2000

LICENSED PRODUCT  
Black

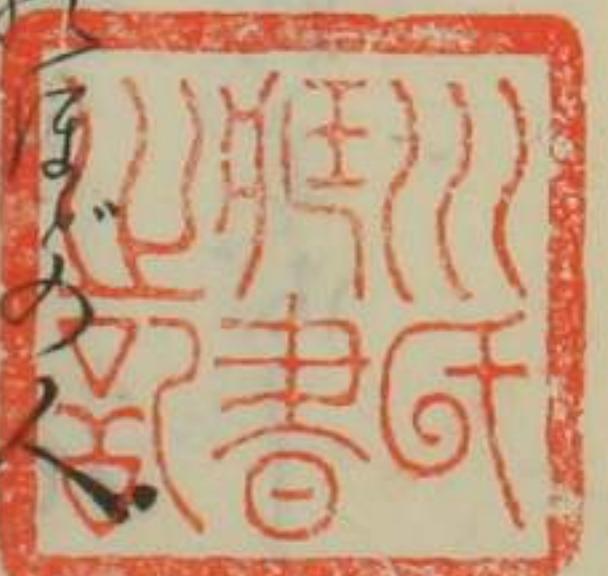


• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4



助辭本義一覽下卷

本末・本義考れ。此條よりあらうを約めても、お學は  
彼頭抄。の諸、八千種著とは、も、うひ類書とこそばくもぐ  
つてたとほどとを、やづ守に皆よましもどりよすかれんて彼を  
とよふせひ。品格をもとよすへのせられ間ち、らん人のもと、と  
あよわく。守との中もあゆきて、つよ集めよせまよれ、にそも  
よぐなよう。多くはくるにそばあれ、うで人ひきもの守のとにそ  
とくもく。用ひよらすも見え、さればよそのせられともと、人い  
のよくわかれ守のてにそばえ、やづて限りあつて、とよとのみかふ  
數ひれうよのよそびらふ。そよひはとくもく。先々貫之集と躬  
恒集とを合せ、既に貫之集と。躬恒のよまれがてたとほしと、躬恒



集には貴之のまれたものと、そのうちのを合せば、其數三十餘種ある  
が、それも、一个丸ても、二十種ほどある。うち中でも互に、いまと  
まとくらぎもありて、百首より九十餘首まで、ハ、ロ、シモ、ヨリ、モ、ト、  
モは、どこのみにて、また、多く、ひまわり、集中、うちづて、七八首にて、其格  
を一首、又ひとつ、あつて、二首まで、えゆゑと、拂ふるはり也。奇絶の、も  
うだうの、ひまわり、ともれこそ、やわらかく、されば、また右は書ともと拂ふじ  
人、も、はまく、と、志野や、一々、ひまわり、ひまわり、數萬の奇  
ひまわり、ひまわり、なまく、ひまわり、ひまわり、ひまわり、ひま  
ひまわり、ひまわり、ひまわり、ひまわり、ひまわり、ひま  
ひまわり、ひまわり、ひまわり、ひまわり、ひまわり、ひま  
ひまわり、ひまわり、ひまわり、ひまわり、ひま

う。とやのう。あとも古きよゆづふせん。此よまくまの。それ  
されとまかへどほり。あまたニまかへたまにとせと。トモヤドリ  
セシモ。ゲンキよみれなどひて。手前ひのゆゑせた思おぼてにまは  
の方よか取くとてよむ。かこやかをかく。とくにかくす  
こそ。とくにかくすよか。守るせのあたなれ。ばを尋のうすよぐひ  
よみるに。とくにかくすよがせかじめの。うつてにまはよまんなど。  
てんきはの方よかくとて。ひよかくとて。まはよ  
のゆづふかくす。一首のよゆづふが。さかみくじと。もじてひく  
と。おみくじと。もじてひくのうされ。畢竟もも尋のうき  
あすらへてもうすよぎ。あまれある秀吉。てふとたのむつ

かすがまよ。まくらはだ。是と以て申候る事と存ひよ。ぬ  
かくもあらうとおどよみか。すゞじよへたまへば。おづく。  
まくらをかき。すやすあ流り。ほ。ほ。ま。ま。な。ま。ま。ま。  
等の。うの。辞。と。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。  
あ。彼。貴。お。也。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。  
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。  
よ。あ。れ。だ。彼。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。  
人。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。  
よ。あ。れ。な。む。か。く。も。本。義。ト。う。り。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

下受辭三轉部

是より一行三段ノ記セム。上段毛紐綻右行モ七徳の結。中段ハ同書

なごい。のとく解して下知をあらざる。凡ての辞とも皆此  
でうと以て傳て。君の切を續く。二のふくとよくやぶらがなり。  
猪の三十三段より以下。二種とよむる辭どりのすを。又もふくえし。  
ゆに又もやうすあり。是より下の受辭どりを。多く一音に解る  
中にも殊る此三精の活き辭を。解る雖く。諭をた言ひてく  
れども。妹の本義。又化う精を。所ひては穿うども。事ある  
時も。うき多く。なほさへねど。もやもうちつひされ。ちまされ  
も再させのと付もす。適其言のとて。患うべく。と承  
うて。あくの説と。と異ざつたちあるれど。まづく。いふやふ  
居て。やまと。の本義。又化う精を。所ひては穿うども。事ある

時も。うき多く。なほさへねど。もやもうちつひされ。ちまされ  
うきときじか。もやもうち。説んどうこそ難義あれ。只十六七ま  
では。本義より諭して。よくわぬ事く。すうゆくのあくとちくよて。  
彼説。もせぬ狀。もくらてせうす也。それづ中にも。先此初段  
の辞こそ。はるも。れて再疎うぐえられ。うれど。まびの方も。ま  
しめんを。打つけ。もひもひも。勿れ。人の見識と。えの。時に  
勢く。あうて。今年。ひよ。來ま。見もれみだし。さむける  
わくは。と承う。げある説ども。年経てのち。いわへのひ。ふくふと  
おひなすゆく。誰う身。も。多。あ。ひ。な。う。よ。く。く。び  
頤て後。も。づ。よ。す。を。す。て。く。

第一段

もうし

きつき

これしき



殿まできとうるを來の義也。それを物の成就と出來といひ又万葉よりと法う  
ノベキもくともベキトトヨアハシマクもまくもきくと固く共ニ為ミナム  
來為スル  
ノモ下サ六段いくの際又委くもとアテ知べし又、その結びベタレと文るを余の  
手次次の殿まで云々し。

第二段

一段 あうれー  
あたのー あきうれーき  
あきたのーき あきしたうれーれ  
此志ハ・あきの志定<sup>シタメ</sup>詩<sup>ヲ</sup>・あきモ万葉<sup>ム</sup>・重波<sup>シキナミ</sup>とも<sup>ハ</sup>・五百重波千重  
もくとも<sup>ハ</sup>・千重浪もきふとも<sup>ハ</sup>・又中古の守<sup>ム</sup>・凡の歌<sup>ハ</sup>とも<sup>ハ</sup>・頻字とも  
するがも<sup>ハ</sup>・本内<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>・此等の重頗<sup>シキシジ</sup>もど<sup>ハ</sup>・もくよ回<sup>シ</sup>し・強く<sup>ハ</sup>い勵<sup>ス</sup>モ辞<sup>ハ</sup>まゆすも<sup>ハ</sup>  
万葉<sup>ム</sup>・痛<sup>タキ</sup>と通<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>・憲<sup>コヒタキ</sup>痛<sup>シキ</sup>も<sup>ハ</sup>・憲重<sup>コヒシキ</sup>とも<sup>ハ</sup>もよもよてきし・されば<sup>ハ</sup>きモ<sup>ハ</sup>喜<sup>ウレ</sup>  
重<sup>シキ</sup>・きの<sup>ハ</sup>き<sup>ハ</sup>・樂重<sup>ダンシキ</sup>・こひ<sup>ハ</sup>き<sup>モ</sup>・憲重<sup>コヒシキ</sup>・うれ<sup>ハ</sup>き<sup>モ</sup>・哀重<sup>カナシキ</sup>と<sup>ハ</sup>うめきなうと<sup>ハ</sup>  
此書を・凡ててに<sup>ハ</sup>ののみ<sup>ハ</sup>解<sup>ス</sup>・されば<sup>ハ</sup>・上のうれ<sup>ハ</sup>・たの等<sup>の</sup>と<sup>ハ</sup>達<sup>ス</sup>を<sup>ハ</sup>  
得<sup>ス</sup>・訛<sup>ス</sup>を<sup>ハ</sup>じ<sup>ハ</sup>こと悉く<sup>モ</sup>そのせん<sup>ス</sup>は<sup>ハ</sup>・五七十卷<sup>モ</sup>ても足<sup>ル</sup>ま<sup>ド</sup>・されば<sup>ハ</sup>

なむ命長くて雅言海成乾此詩も綴續すあまうりとあるなりしも  
せば甚く悉く舉つべし。此詩も綴續すあまうりとあるなりしも  
多れど悉く貴きて一々下段の格もあれどもくじもきの  
きの通音として活きる辨也。かくとも徒をかく五十音才ニ比韵の未定言  
もて受けぞや何ハナれ韵の既定る言ひて受ケリ。オ四の韵は今もる  
言ひて受るも次々辞のまた重く引く放也。其中もばく下段ハ此其と擗出  
又令も言ひて結びて遣ゆる事もすれど一々うえよもまち。そそ云々  
引く。おれいもまづく。あくつゆもうすう。五分して喜<sup>コフ</sup>。日本文書物  
一と換出してされど聲のすなれば。こゝもあてもす。其の外。寺の  
かうに依て是れを。或そとて徒としてハ。ハ。トと云ふと。之にて俗く長閑キ  
ハズジヤ。又ハ。ト云ふ。寒イモコトワリジヤ。又ハ。ト云ふ。ハソリヤ知タコ  
トジヤと云ふ。是ももて換出して云語勢と今も

言ひて受けたる事多きもつて也。とまはと吉等もてあらへば、自の  
守り及ぶる事多くてよし。とまはと吉等もてあらへば、自の

以上二段と現在の年一、下三段と過去の年がもとで、今義のうふ  
す。いはく、うふにはまどりす。おのれおどりと、おもむきをわざむべし。

第三段

此きと。既の義也。もうきと。在既。乞まと。見既。乞まと。聞既。乞まと。  
知既のとくとて。即在既。見既。聞既。知既。とくとほどのとくと。中段のとくと。  
去の義也。サリの支。サリ。去のとくと。もとふ言の例と。ニシテバ  
レム。向去也。向とキ。天雲之向伏限など云。故レム。向避也。隔つよ一の詞也。故レム。向去經。レム。  
七向去經也。西レム。日往去の上多也。死レム。去往多也。退レム。去避の義也。此  
上合せくやひアリ。あれハ此のもじよ。在去。乞マハ。見去。乞マシ。聞去。アリ

卷八

凡十三

コレトシトモアラナレヌ。『アリムニテナカトカアムアリムニ

ルハアレバ

ナムトシテ

絆ベトモキナフ。ミヒトのリの條より。聲の

古四

ナムトシテナカトカアムアリムニ

ナム

第五段

てまどひでき

二一

卷之三

第六段

卷之三

卷之三

卷之三

此の言葉は、也行の音と、空きの一條あり。もと神代紀。1. 骨

完空國ソシモリノトヨロ。曾戸茂梨之處ソウドウモリノ。ある共ハシマ。荒蕪アラフ。不毛ムツモト。物無モノナシ。地ジ。とづアフ。虛空ソラ。空きスカニ。の言ワソツ。虛言ソラノハシマ。の曾ソウ。も空スカニ。一言ヒナ。謂ハシマ。又万葉十四東哥ソハントモハジ。されづハシマ。の岡オカ。粟コメ。すき。尔エラ。まくつ。駒ハシマ。たぐとも和波素登毛波自ソハントモハジ。此結句ハシマ。我ワタクシ。曾ソウ。と思ハシマ。トハシマ。曾ソウ。馬ハシマ。と追ハシマ。却声ハシマル。今世ソノエ。禽獸ハシマ。などと追ハシマ。シ。十三卷ソウサン。まと続ハシマ。と云ハシマ。喚ハシマ。大追馬鏡ハシマ。と書ハシマ。と曾ソウ。と云ハシマ。却掃ハシマラフ。とあらう。枚也ハシマ。湯滌ハシマ。禊ハシマ。とも。抜ハシマ。流ハシマ。却也ハシマル。もの音ハシマ。棄ハシマ。洗濯ハシマ。清ハシマ。のみれハシマ。准ハシマ。ひし。古事記上卷ハシマ。曾陀多岐ハシマ。とあるも。素手抱ハシマ。のと也ハシマ。記傳ハシマ。の訛ハシマ。非ハシマ。ある由ハシマ。芦荻抄ハシマ。弁ハシマ。じ置ハシマ。さて曾ハシマ。素字音ハシマ。りハハシマ。あらう。元ハシマ。の古言ハシマ。な。る。が。よ。適ハシマ。字音ハシマ。も。相通ハシマ。るを。自死ハシマ。よ。一。て。死氣等ハシマ。のたやい。也ハシマ。書紀ハシマ。に。徒跣ハシマ。徒手ハシマ。す。訓ハシマ。古本。今昔ハシマ。皆ハシマ。に。素手ハシマ。とも。書ハシマ。り。神代紀ハシマ。空手ハシマ。來ハシマ。帰ハシマ。とある。と。し。素手ハシマ。比素ハシマ。も。空きスカニ。と。な。と。ゆ。ち。し。や。せ。の。言。も。素肌ハシマ。素館ハシマ。素布子ハシマ。素飯ハシマ。も。云。是。寺。合。せ。し。曾。の。言。は。き。と。ゆ。く。り。て。よ。ま。そ。

物と為作シナス。本其物の無ナシ既て、為作シナフもむかひなれば、君のそとモに  
持シムておけ。即為スルゆふもく也。聖人セイジンハ色を白の虛無スルモト。本無スルモト。染  
て後青赤黒等れ色スカラクをよりゆくと。而ヘテどく也。がくと。救濟スルス。榜統總縛スルス。  
次合の類スカラクも為と元スルモトす詞。又下モ附て。住寄遣起押指載失スルモト。  
為とよて活スルモトも詞スルモトと也。又あの音スルモト。知領識効驗標結縛示スルモトのれ  
も聖人セイジン。教慈スルモト。凡そ三千十音十行の中。齒の音  
も聖人セイジン。行と止と行とのとせ。牙齒と効うと。人の身體と。四肢  
と効うと。やくなれハ物と行為と。多くのとて。専シテ此二行のまとめて。活う  
一ソウ。も中も。行ハ牙比音シナヒノ。多く聖人の取行の方シナヒゆき。牙音  
一ソウ。下モ四段。一ソウの音を。下モ爲造方シナヒゆき。多く思  
くの余下モ出。一ソウの音を。下モ爲造方シナヒゆき。多く思  
く。音體はそれより義とます。並びに。神變不測。奇しもや

1  
べしと思ふよりちれどその格れ称の通音也。されば其續くまゝもおとづる  
格と全く同じてあくねあくでかくふうでスルもれふもでかえねきこゑして  
せひせひへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへ  
相通ふべし。古言ノ。言土。白粉など。不と余と  
凡てた行とな行との音は恒々親しく通ふ例も。書紀の等。泥。泥。涅。耐等の假  
字と。では。ねとも當よ通。用ひ其語も又互に通へり多く。又吳漢代  
ニ音。那。奈。任。柔。奴。諉。禰。泥。龜。能など。の如く。吳音にて。ナニヌネノアム  
モ。漢音にて。必ずダナヅテドナカツリ。とて教ぶし。また又此不のやく畢  
のぬよ置。よ等のナハ下れぬの條よえべし。

第七段

正  
之  
十

三  
七  
三  
三

れ  
それ

此正。されど。入。入。入。の。ア。ヌ。也。たゞ。と。常。工。有。居。な。く。と。一。字。も。や。う。そ。う。

第八段

参入ナリ奉ル奉入の義 たてまづすと云し奉出  
の義なると合セ考フベシ。まれハ既に有  
本つまを有入居ヘニ義ナリ。此外々の格ハ折織モトモ折入織入ヘ  
ナム。古書を見馴らん人をうづくにかづきモモドキトマリ。アリオリ  
のと等の音義を下せ一段の得の際ナムと考へ合トジ。アリナリ  
セナリモナラセナリ。セナリモナラセナリ。セナリモナラセナリ。

三

うを敵うる爲に、西うつむきで、まことに、おれいき爲に。  
な、もくべし。おまえと、あらかじめ、みまきなど、事藝の詞と、同  
例として、才三韵の續く言ふて、用法すまこと、才二の韵、又才四の韵等に  
て、體法よつひふゝて、あともつて、恒て不とほて、老きぬ、絶きぬ、枯きぬ  
ほききぬなどといふ。又万葉は、ほもまれ死きぬをいふ。源氏物語卷二、ふき

かくの凡の事は、それからハモニを行幸す  
すと行幸す。日記とちよちよと。日記とちよちよの事も、  
ちよちよの方々がちよちよと。ちよちよと。

第九段

十  
九  
日

† { } † { }

ナニ  
ナニ

ナリハ尔在ナリモ尔在ナリ余在の約ね候也。おののすハ音ニテナム  
歌シテ誰も生れるナリホドカハツラギヨリモモクナシナキ。さて  
此辯の恒ノサニの約の連く言ナリ受て切く経ナリケ、うらむし。即なの  
言。おと葉ノモ故也。又新吉ニシハヤヤアモモナリナシ。シ  
ラムシバズミテカムシタマリ。此モアトモナシモナシモナシ。  
耳をきマシムハト。物尔在隨と本音と加フされバ、シト定ムナフ。又此  
ナリモ。ぬつゆナムナシナシモナシ。ハナシナシナシナシナシ。

第十一段

たる まきせう

たれ  
くわ  
れ

歌之續有光。光

第十一段

けり

けり

けれ

けれ

此句。此句。此句。往来。來。來。言の活き。も。辭也。されば萬葉。か。詞の。來。と。書。又其。來。と。動。つ。せ。し。以。て。く。ら。や。成。ふ。く。く。ら。や。な。く。い。く。く。ら。れ。ふ。春。者。來。爾。來。な。く。同。語。續。く。も。も。も。就。て。い。り。も。お。お。す。す。も。れ。ど。下。の。來。そ。既。と。辭。と。を。わ。り。放。と。重。ね。て。忙。う。き。き。と。往。の。や。そ。君。の。や。來。の。活。き。も。な。れ。ど。彼。ハ。結。く。り。成。く。も。ハ。さ。き。く。ハ。あ。う。く。り。ハ。れ。く。う。き。の。れ。の。れ。ふ。ぞ。じ。と。待。來。成。來。笑。來。增。來。觸。來。の。く。も。あ。く。す。只。其。手。の。落。著。治。定。し。る。を。云。辭。也。又。上。く。か。て。な。る。の。言。と。添。て。い。く。と。あ。る。ハ。く。り。と。往。來。ア。ク。リ。ハ。竟。來。也。又。ナ。リ。と。そ。く。く。う。け。と。續。け。と。彼。落。著。れ。方。も。歌。も。辭。と。と。あ。れ。な。り。は。一。き。う。玉。と。く。む。牠。の。子。な。が。向。と。も。は。き。ぶ。と。ゆ。く。ぬ。な。う。き。を。

後拾十五

や。と。ご。く。に。う。く。ぬ。く。の。日。あ。つ。ほ。ぐ。の。く。る。さ。う。く。ら。う。  
同  
く。く。く。と。く。く。よ。と。お。も。く。と。し。く。き。く。と。く。く。う。く。う。う。  
后拾十六  
石。の。も。ふ。す。す。く。の。う。く。う。と。や。う。と。く。う。は。月。の。じ。ぐ。あ。う。く。と。  
太。う。く。是。等。の。や。く。と。え。え。は。と。向。う。け。く。る。や。あ。の。か。う。約。あ。う。て。下。これ  
ハ。云。云。な。う。く。り。と。と。わ。き。う。され。ば。若。よ。う。了。解。も。辭。と。い。う。だ。う。  
多。く。れ。中。く。は。此。か。け。詞。な。き。も。稀。う。は。あ。き。ど。代。それ。と。て。る。の。と。ふ。み。ぞ  
歎。せ。る。處。の。よ。き。は。あ。き。ど。され。ば。それ。と。一。格。の。こ。み。を。す。も。え。ば。き。の。  
な。く。と。も。の。結。と。此。機。を。舉。さ。う。し。そ。い。う。ま。る。す。に。う。又。う。け。く。と。も。  
か。て。此。も。く。似。く。と。あ。る。

後拾六  
金。四。歌。が。わ。ま。と。の。ま。か。と。く。れ。ゆ。る。あ。ま。の。歌。う。ひ。く。へ。に。う。く。

十六  
なみより又も一歩もさうやうをもつておらず。『ねうとう』  
此れ上へまき。されば、うりやむなど。了解のと趣と先づて、下  
り。と決着し。もなれハ。其のうハ。即ちうちのふせ。そそほ桂のす。八  
ふつき道みをきれくと。先づマ解して。まて此ふまとも。めぐらちまたへま  
す。と決定する也。又金葉のすを。高麗もす掉のるよもれす也。  
了解して。ちと戸向のむ。やひぐからりと。決定しても。千載のすを。  
ゆる。うゑゆくべきの。ゆくの外ようやくとも。了解して。まてだうかく  
よそ。此れもまことに。と決定する也。はくと。もの緒六巻。生  
れ。けふうと名づけられても。うれびて。此れも。文うきをきくもと。  
漢民使夜苦。は。絆く多くふ。いじくつゝも。一ツじやくも。もがくる了解  
ゆきの緒也。ち後と解。よほ耳とれて。椎量。このく付を。まくの達ひ多き。

よや打つけよ。か耳疎きやうとも。まのせ義より推スときハ元  
のふ實と失ふす。シヨリ。右のやく。其やつを決定の爲ナリ。アバ  
はくもテ用ひんやう。わくおおきなれど。まぐてに草く  
ゆく。又。ちうる。一格とあ。こそ。みどり。ごめと約束  
ひよし。されば。ふぞあらうとえと。もす。因。くして。かく了解の  
歌。く。なり。

きりもせうきぬめをほくとす邊りにござ。ハナムナリ。成し  
まくは邊りにござ。あれ。古事記よりある。其物の形容と見  
て。も成ゆ様子と詮ふすみのり。俗言として。ハナマギハ  
様子ジヤ。隠ル、間隙ハキハニ成タ様子ジヤ。浮ハキハ間隙ハキハニナラ様子ジヤ。ハ成ル間隙ハキハニ成  
タ様子ジヤ。然見エルと云意也。又。アリと同語とも。此同詞と。ちうねづ  
ナリ。ハカツカツナリ。ハキヌヅカツナリ。ナラヌヅカツナリと云ても。全ラ  
風呂ハグロにてかぶし。又。今集五。ハナマギのもの。ナラヒナハミ  
ハナマギアリ。ハ月ハツク。此。ゴの。ア。若れ。ア。ナリ。下のみ。山  
ナリ。ハナマギナリ。ナリ。引。ウ。の。ナハ。追考の。ハナマギと。例の  
俗言に。ハル様子ジヤ。其故ニ。ナラヒ。此故の。ナリ。一言。ナラヒ。將。散  
ナラヒと。銭。ナラヒ。方。ナラヒ。の。言。含。ナラヒ。ナラヒ相照。ナリ。ナラヒ。ナラヒ。散ラ

第十三段

因爲なまくとあくびしんても行の音をハヒフヘホ濁る音をミムメモヒ  
音に通ひ故ふめとし。ジムルニセ也。其例と一ツ。ハクシトアホ  
ハクシトアホ。ハクシトアホ。ハクシトアホ。ハクシトアホ。ハクシトアホ。  
トモエホ。トモエホ。トモエホ。トモエホ。トモエホ。トモエホ。トモエホ。

三  
一  
一

卷之三

卷之三

萬葉ノ有字と添ヒ。聞有。聞有。行有。敷有。生有。書有。同ド。れも。とす。に  
書トテ。

第十四段 せむ タヌリ  
せむ タセル タヌリ  
せれ タヌリ  
照有 ナセリ タトセリ  
照有 ノコセリ フヨリ ウツセリ  
移有 ナセリ タトセリ  
移有 ノコセリ フヨリ ウツセリ  
宿有 ナセリ タトセリ  
宿有 ノコセリ フヨリ ウツセリ  
残有 ナセリ タトセリ  
残有 ノコセリ フヨリ ウツセリ  
臥有 ナセリ タトセリ  
臥有 ノコセリ フヨリ ウツセリ  
移と うやも、 照と うやもと活う  
為有 宿有 残有 臥有 移有

第十六段

此ふの機能也。言とあり。思とあり。問とあり。匀とあり。逢とあり。習とあり。とある。言有。思有。問有。匀有。逢有。習有。とある例。多くある。

六帖

六  
七

宗光玉の餅  
されば、とくにうれば、むすびのくまをやがて、うわ  
以上六段、クスツフルの活轉する辭、もなむ。  
タラキ

のれ。皆此の法きとも辭也。あれども人を従へなば、従ばたゞで、従て、  
かまへ。従す。<sup>イナ</sup>なまもやハ従ぢやのとせ。又みまは。従き。<sup>イニ</sup>みまう。従う。  
ハ。従し。<sup>イニ</sup>みまう。従う。小きんハ従<sup>イニ</sup>きのとせ。又、<sup>キエイホ</sup>消従<sup>ハ</sup>きる  
れハ絶従<sup>タエイネ</sup>がまれねハ忘従<sup>ワスレイネ</sup>のとせ。然<sup>ハ</sup>此段の辭とも。やがて、従<sup>イヌ</sup>し。  
ゆきうハ従す。ゆきうハ従<sup>イヌ</sup>し。ゆきうハ従<sup>イヌ</sup>し。ゆきうハ従<sup>イヌ</sup>し。  
ゆとめべき也。さて雅言の従、従、従<sup>イナ</sup>き。今<sup>イニ</sup>の俗言の來、來、來<sup>キヤ</sup>のとせなり。  
そぞき万桑り。春者來去來<sup>ハルハキニケリ</sup>。來<sup>キタ</sup>もす。去<sup>キタ</sup>もす。來<sup>キタ</sup>もす。去<sup>キタ</sup>もす。  
のゆハ既<sup>ハ</sup>蘆荻鈔。又山彦冊子初篇三卷。まればの條などとし、會せて、  
やがてしだらをせのとせ。是等の従去の言と、俗言との心地をも  
う。たゞやくわづへばと云べきとば。たゞと云ふべからず。

新續古十七  
万二十  
わくらうくまねなまめと、うまれ、もともあもてどこのゆくらん  
ちやぶのものへばまもあれぬと、君うは名よりられや  
古今のけ、けざるてくわづのくさんと、世のくさんと、ぬと往の義と、うたふ  
後を、ともふと、浮きと、近來のてまほの書、ひがも言のまこと教せざる  
より、其書と、えなぐ、お供と、れ多きなす。又、此やと、向中まで、下へは、ま  
よは、やまとひて、ふと添へ、かく時々ねとのみ、ひて、ふと添へば、そそなむね  
り。べ、やうるふを、どうぞ、べ、やうねと、なうねよ、あくハ、そそをと、受、ふ  
と受るも、續く格なれば、又、まうぬと、まうややなど、續る時々ねとのみ、ひ  
て、なうやまと、なうやまと、受ケ。やして、よに通ふヤ也。此ヤハ、歎息の格  
と受すを、切く格なれば、也。彼既に、引る、乞正ぬより、と、えられハ、直く  
まう思ひ、又誰もへずれば、此段のゆと、上の不のゆと、互に置ざま。

絶らざくもゆるゝものあり。若し大もと付此畢のねなば。もぬ  
と右の如く。其往とくもく試て。上下の續きて叶ひ。居る也。又上の不  
のねなば。もねと不と。皆將じき。其處のうちに叶ひ。もれ居る也。  
又此ニツのねと受る辭。大もれ定りと。不のねも。第一の韵。カサタナハ  
ヤラと。又第四の韵。エケセテネヘメエレト。連きて。オニセ韵。續う。彼天の川原上生ぬ物。や。などのれ。ハ。と稀。ユ。ハ。あれど。こハ。不見。ス。居。ス。似等の動。う。ぬ。詞のれな。故也。常。ハ。ちらね。ち。リ。ね。ハ。も。よ。ね。  
毛。こ。ぬ。など。活く。又畢。ニ。のね。ハ。第二の韵。キシチニヒミイリ。と。又。オ四の韵。ケ  
詞の例。ハ。非。す。又畢。ニ。のね。ハ。第三の韵。キシチニヒミイリ。と。又。オ四の韵。ケ  
セテネヘメエレト。續きて。オ一の韵。も。う。は。う。是又。一。の差。ナ。う。  
其中。互。ニ。四。ヒ。韵。す。續く。の。を。む。か。し。絶ら。ハ。き。う。め。く。な。れ。が。  
こそ。兩。義。小。亘。る。处。既。ム。え。づ。や。く。ハ。よ。ト。の。か。り。に。叶。ふ。と。ス。て。定。る。わ。が。  
な。れ。が。却。て。性。う。ま。う。そ。し。く。比。ぬ。の。用。ひ。ざ。す。い。そ。せ。の。人。比。候。よ。居。く。

第二十段

多うの故ニかずに。うへとひおくせ。移おほよし。かくまむにまへどく。そ  
ると。又つも。やまゆる。あるも。ゆひ安きと。か傳ふくさと。うりて也。  
一十段 つ えつ まつ つ も えつ えれ きれ きれ  
此つ。竟の義。て。さうハ。見竟。まつ。聞竟。ひつ。言竟。ゆりひつハ。  
思竟。ハ。くづ。暮竟。がす。無在竟。のき。此つ。恒。つて。活きて。  
つを。右。外。よ。へ。つ。な。ハ。竟。ナ。ハ。へ。い。ジ。ハ。竟。ジ。シ。へ。い。ム。ハ。竟  
う。の。を。又。て。き。ヘ。ト。ハ。竟。ノ。ハ。ヘ。テ。き。ハ。竟。ヨ。ヘ。ト。ハ。竟。ヨ。ヘ。ト  
キ。竟。ぬ。也。さて。此段の。つ。第二の韵と。第四の韵。よ。ほ。く。く。の。上。の。ゆ。と。回。ド。  
又。而。有。来。有。往。有。竟。有。等。何。き。も。過。去。の。諱。な。ま。中。よ。た。る。け。る。や。迄。ハ。  
ま。の。き。ア。リ。ハ。ま。で。に。う。そ。て。え。る。す。も。あ。れ。と。此。の。こ。よ。ま。の。き。ア。リ。の。す。に  
ま。か。く。て。そ。も。う。し。竟。る。の。義。よ。て。乾。中。遇。ま。の。と。れ。ま。う。故。也。又。ヘ。ジ。

ひしをも。其の辭の數を上段のぬより下三十二段。う。う。う。それまでの向。ちやくじ。  
ひし。やく。へうんとす。に。そ。も。徒。結。辭。よも。か。りて。中。段。の。辭。よも。も  
き。受。ぬ。例。な。り。ぬ。べ。し。は。べ。し。ぬ。る。ら。引。ふ。へ  
ん。など。は。云。ざ。る。づ。ご。と。し。ら。ん。よ。る。う。ん。と。云。そ。く。詞。と。  
引。く。と。云。れ。ま。る。辭。と。あ。も。な。ど。と。是。ま。く。か。づ。し。等。の。格。と。得。ま。時。と。  
ひ。く。初。ま。め。ま。き。と。そ。く。ま。ー。き。ま。の。な。れ。ば。そ。う。底。河。の。つ。け。ま。よ。より。お  
か。ゆ。べ。き。わ。と。せ。の。人。と。結。び。と。相。会。ま。る。の。み。と。て。て。と。ほ。と。ゆ。び。え。と。  
ま。す。な。れ。ど。結。び。と。あ。や。ま。と。行。む。が。ま。の。ひ。う。す。ひ。う。す。ひ。う。す。ひ。う。す。辞。の。く。げ  
と。混。ふ。す。本。語。破。き。と。言。と。か。く。す。ひ。う。す。ひ。う。す。ひ。う。す。ひ。う。す。ひ。う。す。ひ。う。す。  
上一段 そ ふ ま で も  
を る ふ ま で も  
そ れ ふ ま で も  
此 段。紐 鏡 玉 細 緒 等 に 为 来 得 寝 經 の 五 ッ ト 一 ッ ヲ 統 されど 今ハ 分 ち て サ  
レ づ 納 と 加 づ 也 但 彼 書 ど も て 見 合 せ な ん 时 の 便 と ゆ く 也 次 第 を

第二段

子もて此  
をもつて

あるふうをもつ

子守歌  
おひる出

此段、紐鏡玉丸緒等に為來得寝経の五ツと一ツ又統へれど今ハ分らてサ  
リズ、糸と加ふる也。但シ彼書どもて見合せなん時の便もゆゑて次第を

を五ツと合せて一段とします。

同

く  
みちく  
かきつく  
くる  
みちく  
かきつく  
れ  
みちくれ  
かきくれ

かきつく

くる  
まぐわ  
かきつぶ

れ みちくわ  
かきくわ

同

万十五

二

得之

۵

得之

あ行の音ハ諸の音セ祖ムシ恒ニ詞の上ノのみ居テ下ノ附セ音ナムドリ。五十  
中モ行の音ヒ下ニ附セると引行の音の上ニ居ラズムとのニツニソ奇一キモノナコクレ其言も又天揚在家網イ  
蜘蛛ウタウクウズエフリオシオフオツフの浮上鉢枝柄蘆詰置貟龍衣ナムド凡て物の上ニ添加ハる一統アリ此揚足  
浮ふ貌ムホノヅク物ハ生成ミト味あれハ此統ヨリ又生普溢逢合預率ナムル  
鑄納入産殖受得獲撰生興補余ナムドサニ物の蕃息アリ受得大方に

派<sup>カ</sup>き<sup>カ</sup>くちう。喉音ハ息氣<sup>イブキ</sup>也。息氣<sup>イブキ</sup>の物と生育<sup>カク</sup>もくゆう。下せ共八段のふれ余と<sup>カ</sup>合<sup>カ</sup>ひし。此段も平言に得<sup>レバ</sup>もナシ。モレ徒<sup>カ</sup>が<sup>カ</sup>立<sup>カ</sup>てし。モ<sup>ト</sup>ミ<sup>テ</sup>詞<sup>カ</sup>を上<sup>ス</sup>れ為<sup>ク</sup>來<sup>ス</sup>。モ<sup>ト</sup>の如<sup>シ</sup>し。

同

ぬ<sup>ヌ</sup>寝<sup>ヌル</sup>

ぬ<sup>ヌ</sup>寝<sup>ヌル</sup>

ぬ<sup>ヌ</sup>寝<sup>ヌル</sup>

此<sup>カ</sup>行<sup>カ</sup>のま<sup>ナ</sup>サハ。既<sup>マ</sup>上卷の<sup>カ</sup>部<sup>カ</sup>。此<sup>カ</sup>の寝<sup>ヌ</sup>。伸<sup>ヌ</sup>萎<sup>ヌ</sup>の義<sup>カ</sup>也。されば<sup>ヌ</sup>寝<sup>ヌ</sup>ト<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>して。古事記の<sup>カ</sup>古事記の<sup>カ</sup>伊<sup>ア</sup>亥<sup>イ</sup>斯<sup>シ</sup>那<sup>ナ</sup>勢<sup>セ</sup>ナ<sup>セ</sup>。即<sup>カ</sup>伸<sup>ヌ</sup>の義<sup>カ</sup>も。のび<sup>カ</sup>な<sup>カ</sup>ん<sup>カ</sup>。皆<sup>カ</sup>音通<sup>カ</sup>ひ<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>也。此段の辭<sup>カ</sup>ども。例<sup>カ</sup>の平言<sup>カ</sup>も。ぬ<sup>ヌ</sup>も。き<sup>ヌ</sup>な<sup>カ</sup>ん<sup>カ</sup>。ね<sup>ヌ</sup>と<sup>カ</sup>え<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>。其<sup>カ</sup>丈<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>。ぬ<sup>ヌ</sup>と<sup>カ</sup>え<sup>カ</sup>き<sup>カ</sup>處<sup>カ</sup>も。ぬ<sup>ヌ</sup>と<sup>カ</sup>誤<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>多<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>り。ぬ<sup>ヌ</sup>べ<sup>カ</sup>き<sup>カ</sup>也。

同

ふ<sup>フ</sup>サ<sup>サ</sup>と<sup>フ</sup>ふ

み<sup>ミ</sup>る<sup>ル</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>す<sup>ス</sup>

え<sup>エ</sup>れ<sup>レ</sup>ぞ<sup>ゾ</sup>う<sup>ウ</sup>れ<sup>レ</sup>

此段の<sup>カ</sup>ま<sup>ナ</sup>下<sup>カ</sup>せ八段<sup>カ</sup>なる<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>。其<sup>カ</sup>統別<sup>カ</sup>。さ<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>辭<sup>カ</sup>ども。彼<sup>カ</sup>喉音<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>穩

う<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>息<sup>イキ</sup>氣<sup>キ</sup>の續<sup>カ</sup>き連<sup>カ</sup>方<sup>カ</sup>より出<sup>カ</sup>て。物<sup>カ</sup>の續<sup>カ</sup>き連<sup>カ</sup>方<sup>カ</sup>法<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>づ<sup>カ</sup>也。されば<sup>カ</sup>凡<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>よ<sup>カ</sup>な<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>ひ<sup>カ</sup>。舌<sup>カ</sup>な<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>な<sup>カ</sup>づ<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>水<sup>カ</sup>な<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>な<sup>カ</sup>づ<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>ど<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>り。年<sup>カ</sup>月<sup>カ</sup>云<sup>カ</sup>し。行程<sup>カ</sup>云<sup>カ</sup>も。皆<sup>カ</sup>回<sup>カ</sup>き<sup>カ</sup>也。被<sup>カ</sup>此<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>五<sup>カ</sup>音<sup>カ</sup>合<sup>カ</sup>せ<sup>カ</sup>て。一二<sup>カ</sup>三<sup>カ</sup>四<sup>カ</sup>五<sup>カ</sup>延<sup>カ</sup>。御<sup>カ</sup>駕<sup>カ</sup>。行<sup>カ</sup>。槁<sup>カ</sup>間<sup>カ</sup>。機<sup>カ</sup>旗<sup>カ</sup>。日<sup>カ</sup>桶<sup>カ</sup>。梭<sup>カ</sup>血<sup>カ</sup>漕<sup>カ</sup>。引<sup>カ</sup>挽<sup>カ</sup>。間<sup>カ</sup>久<sup>カ</sup>經<sup>カ</sup>。吹<sup>カ</sup>船<sup>カ</sup>。經<sup>カ</sup>經<sup>カ</sup>麻<sup>カ</sup>間<sup>カ</sup>。程<sup>カ</sup>蕃<sup>カ</sup>な<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>し。此<sup>カ</sup>等<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>中<sup>カ</sup>。日<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>出<sup>カ</sup>で<sup>カ</sup>て。日<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>東<sup>カ</sup>む<sup>カ</sup>西<sup>カ</sup>渡<sup>カ</sup>。設<sup>カ</sup>立<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>故<sup>カ</sup>。械<sup>カ</sup>、桶<sup>カ</sup>、範<sup>カ</sup>、援<sup>カ</sup>、血<sup>カ</sup>漕<sup>カ</sup>等<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>皆<sup>カ</sup>渡<sup>カ</sup>。經<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>あり<sup>カ</sup>て。其<sup>カ</sup>義<sup>カ</sup>一<sup>カ</sup>つ<sup>カ</sup>少<sup>カ</sup>ゆ<sup>カ</sup>れば<sup>カ</sup>。又<sup>カ</sup>機<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>出<sup>カ</sup>せ<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>。機<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>經<sup>カ</sup>て織<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>。延<sup>カ</sup>立<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>義<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>ゆ<sup>カ</sup>れば<sup>カ</sup>。又<sup>カ</sup>其<sup>カ</sup>機<sup>カ</sup>物<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>。と<sup>カ</sup>手<sup>カ</sup>經<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>て。系<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>終<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>。經<sup>カ</sup>縛<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>延<sup>カ</sup>。まと經<sup>カ</sup>て成<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>。ものな<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>ば<sup>カ</sup>。又<sup>カ</sup>舟<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>經<sup>カ</sup>根<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>義<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>。海上<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>遠<sup>カ</sup>く經<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>な<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>ば<sup>カ</sup>。と<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>よ<sup>カ</sup>ぐ<sup>カ</sup>。此<sup>カ</sup>他<sup>カ</sup>。何<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>皆<sup>カ</sup>。經<sup>カ</sup>意<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>故<sup>カ</sup>出<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>。と<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>此<sup>カ</sup>段<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>辭<sup>カ</sup>也。

古<sup>カ</sup>ナ<sup>カ</sup>タ

み<sup>ミ</sup>の<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>う<sup>カ</sup>小<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>ん<sup>カ</sup>。み<sup>ミ</sup>も<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>づ<sup>カ</sup>わ<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>人<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>。と<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>よ<sup>カ</sup>ぐ<sup>カ</sup>。

かくもふとまづべき處とせんせのハシモト様であら。是れ上の例と同じ。

第二段

にかく

にかはる

にわはれ

此よりを妙く綴後あとにづる今之とてはれりてハ今句、  
もとよりは今知き  
もとよりは今著。ハ  
もとよりは今見。ハ  
もともとハ今思。まうすハ今聞。  
の辯。ども。され安きよ。仰り。かくして其令のちを。為の義也。ハ  
もせな。ども。の志。せも。共1。為。為のことをまとめて。かくして。為の音義ハ上  
の六段。その條より出。むの音義を下せ九段のむの條より出。り。

第廿三段

۳

卷之三

ヨラ  
ハ  
レ  
シ  
ル  
レ  
ル

第廿四段

くあぐ  
たむく

あく  
たむく

あれあぐれ  
たむれ

重複とも嫌らず其処々少しく出さん方々ひ人の手と便りよ  
うんともちく。此書ハ一やう本書き大意と採出ものよりて一紙  
も少なけれと多くせればかくにそくあくゆづり合せて省くれば多くも。  
四段 く あぐ  
たむく  
くま あぐ  
たむく  
これ あぐれ  
たむくれ  
此段より下三十二段までの九段をクスツヌフムユルウの言<sup>ハタク</sup>して結<sup>ハタク</sup>る。常の諱  
やもなれど結の三轉1分<sup>ハタク</sup>と以てくに出せば也。彼上の十三段より次六段は  
辭のれなり。

か行は音の入れ作行一関

カ行ハ音の入れ作行ノ関ニと云ハ牙音にて此五音と唱みて其口の動き如ク  
毀如切如碎如削如磨ちゆうとうづくらひる反鋸截刻錯碾摧崩  
出觸蹠削嶮滅壞破樵誅殺展轉等の類は詞の多き也こそ既も云  
う如く音の上に牙齒は動くも入れ體ヨリナリ手足の動くも如くナリムの

入比所行よれ也。就中くれ音ヨモ。括縛組紵繩縁益合交分賦扶ナリトニ。多くてもあざに多くつり。詞の下附ても。褰被潛頗顧。炊漕拷拔捧置磨殺築挽引纏卷ナリ。即物の成就すと。いくとひ伏トハ。一外とくと云わぬ外とくと云ひ。為をなする多き。前後ともやうやく会びし。かれハの舉手向解續懸明等のくと。各まよとまゆき。おづく明く。大うの言は義と解ふも。先其音と口づうつて。唱へ試ん。すれかども。そのまよたゞへ。右のくの音にて。括とよ縛と。唱へ試ふ。其の口形唇相聚而結りて。即物と括ふ。ぐくたり。又街と言と。唱へ試ふ。其口の形物と街の状する。是即其音義也。諸音共以此て。味もへりゆく。昔もう傳承せらるまゆも。えも。まくば。ハ掘串也。ほの又ふ也。もぞす。物ニツ帶ヒ重り。

詔の歌ハ誰も云ひ切ど其握カリハ又ソラの義ヨシ也其弗ハ又マツモ言  
そと推スルを得スル者アリ者アリもモカカムモテ。詔歌タシメと云ふのヨハあくアクば。  
何事ナシの語ハシマも單直タマツなる本音ホンオノ解スルと云ふ。語釋タシメと云ふべれ。

五の段云々十九段のぬやもやれより下カ三十二段のううもうれまで合せて十四段と  
カ三十ニ段より。カ三十八段。クスツフムルの古段の辯<sup>トモ</sup>あり。自化のううノモ。二様又  
やも羽もア。ミ例<sup>トシ</sup>と<sup>トシ</sup>。解ハ<sup>トシ</sup>ト<sup>トシ</sup>と<sup>トシ</sup>と<sup>トシ</sup>。ハ<sup>トシ</sup>ト<sup>トシ</sup>。ハ<sup>トシ</sup>ト<sup>トシ</sup>  
テ。セ十四段の格ナ<sup>トシ</sup>と。他ヒ<sup>トシ</sup>ト<sup>トシ</sup>ヒ<sup>トシ</sup>ヒ<sup>トシ</sup>ヒ<sup>トシ</sup>。ハ<sup>トシ</sup>ト<sup>トシ</sup>。ハ<sup>トシ</sup>ト<sup>トシ</sup>。  
下の六段の格也。碎<sup>トシ</sup>。自ラ<sup>トシ</sup>ハ<sup>トシ</sup>ハ<sup>トシ</sup>ハ<sup>トシ</sup>。ハ<sup>トシ</sup>ト<sup>トシ</sup>。ハ<sup>トシ</sup>ト<sup>トシ</sup>。  
と<sup>トシ</sup>。ハ<sup>トシ</sup>ト<sup>トシ</sup>。ハ<sup>トシ</sup>ト<sup>トシ</sup>。ハ<sup>トシ</sup>ト<sup>トシ</sup>。下の六段の格也。折<sup>トシ</sup>。闕<sup>カク</sup>  
刀<sup>キム</sup>。破<sup>ヤヅ</sup>。ナ<sup>トシ</sup>。四<sup>トシ</sup>。それ皆<sup>トシ</sup>。ハ<sup>トシ</sup>ト<sup>トシ</sup>。

此モハ馬の毛をなまくとちゆき辨の下に附て法ノリ。言の上に置て。救済。統縛。  
次合<sup>スカフ</sup>もくもく。又下附て。この<sup>モク</sup>。任寄。遣瘦載。失<sup>ナシ</sup>。ソク。此外。起立。  
押。指<sup>サス</sup>。のれ。ねまう。上段のくは法<sup>カ</sup>きどもく。もとのれん。もるを。此<sup>モ</sup>行キ。  
齒<sup>スル</sup>。音<sup>ナシ</sup>。故<sup>モ</sup>。彼牙音と曰く。為方<sup>スル</sup>の一統も<sup>モ</sup>也。言<sup>ハ</sup>ひを既<sup>モ</sup>あらむをもく。あハセ  
考<sup>ハシ</sup>し。

## 第廿六段

つ ソブ

つ もろ

つ れ づれ

大行<sup>カ</sup>。吉<sup>ヨシ</sup>。五音と唱<sup>ハ</sup>ふ。口の動き。如<sup>ク</sup>撥<sup>カ</sup>。如<sup>ク</sup>押<sup>カ</sup>。如<sup>ク</sup>突<sup>カ</sup>。如<sup>ク</sup>扇<sup>カ</sup>。  
正<sup>モ</sup>音<sup>コト</sup>と人の所<sup>レ</sup>。立居。進退の<sup>モ</sup>。聞<sup>ハ</sup>一統も<sup>ナシ</sup>。凡<sup>モ</sup>の中<sup>モ</sup>にて動<sup>ハ</sup>くもの。  
彼牙齒と舌の三ツをなす。牙齒ハ<sup>モ</sup>くどく。舌を抄<sup>ハ</sup>う也。故<sup>モ</sup>音の動きも。又牙  
齒ハ<sup>モ</sup>くどく。舌の方<sup>モ</sup>。一等ゆるやう形<sup>ハ</sup>す。右の辺<sup>モ</sup>のや。左の辺<sup>モ</sup>のせ。段のくり  
際<sup>モ</sup>会<sup>ハシ</sup>し。ももまくとく体<sup>モ</sup>くづし。以<sup>テ</sup>牙、齒、舌の三ツ。喉唇のニツと加<sup>ヒ</sup>。いのくそれくに掌<sup>ハ</sup>る处<sup>モ</sup>ある。

音の出所。言の統と索<sup>ハ</sup>ねゆうべ。千言万詞。ハ<sup>シ</sup>ヌ<sup>シ</sup>。綾<sup>カ</sup>き<sup>カ</sup>。勤<sup>ハ</sup>ん<sup>ム</sup>。華  
小<sup>シ</sup>こそそ。任<sup>セ</sup>う<sup>カ</sup>き<sup>シ</sup>も<sup>ア</sup>る。その<sup>モ</sup>れ。心<sup>シ</sup>味<sup>シ</sup>も<sup>ヒ</sup>も<sup>ア</sup>る<sup>ハ</sup>。足  
や<sup>ベ</sup>し。そもく人<sup>ハ</sup>五<sup>シ</sup>躰<sup>モ</sup>りて。勤<sup>ハ</sup>きと<sup>ナ</sup>さ。音<sup>コト</sup>も又右の五音有  
て。勤<sup>ハ</sup>きと<sup>ナ</sup>す。其<sup>ノ</sup>殊<sup>ハ</sup>行<sup>ハ</sup>。又五等<sup>モ</sup>一<sup>ト</sup>て。互<sup>モ</sup>相通<sup>ハ</sup>ず。其<sup>ノ</sup>數<sup>モ</sup>又五十  
少<sup>シ</sup>て。世<sup>モ</sup>あ<sup>リ</sup>ゆる物の声と<sup>う</sup>つも<sup>ク</sup>餘<sup>リ</sup>も<sup>セ</sup>ば。是<sup>モ</sup>とえ<sup>シ</sup>す  
もあし。又五十の音<sup>コト</sup>も。一音無<sup>カ</sup>。活用の統。各五統<sup>ナリ</sup>。然<sup>モ</sup>言靈と<sup>ナ</sup>へ。神の御息と称<sup>セ</sup>ば。うべ<sup>シ</sup>ど<sup>モ</sup>く。古書<sup>ハ</sup>五十  
の二字と。いの假字<sup>ハ</sup>用<sup>ハ</sup>い<sup>カ</sup>るも<sup>タ</sup>故<sup>モ</sup>也。い<sup>カ</sup>なれば。かく五の數  
と。これ<sup>ハ</sup>はうあらん。天地のそ<sup>レ</sup>の時。五柱の天津神<sup>モ</sup>一<sup>ト</sup>て。天<sup>シ</sup>津<sup>シ</sup>神<sup>モ</sup>一<sup>ト</sup>て。天<sup>シ</sup>  
地の分れそ<sup>レ</sup>る。所以<sup>モ</sup>ハ思合<sup>ハシ</sup>されて。ビトモアヤ<sup>シ</sup>キ<sup>ム</sup>も<sup>ヒ</sup>  
トイ<sup>ム</sup>。言語の<sup>ハ</sup>ほぐ<sup>ハ</sup>と。はの勤<sup>ハ</sup>きに隨<sup>ハ</sup>る。うとも<sup>ト</sup>ちや<sup>シ</sup>のうれ<sup>シ</sup>。  
是<sup>モ</sup>と<sup>モ</sup>も<sup>タ</sup>國<sup>ノ</sup>の語<sup>モ</sup>。天地の<sup>ハ</sup>づくにて。うも<sup>ト</sup>う私<sup>モ</sup>。優<sup>ハ</sup>で貴<sup>シ</sup>  
所<sup>モ</sup>ある<sup>モ</sup>と<sup>モ</sup>思<sup>ハ</sup>。彼漢人<sup>ハ</sup>。ナガ<sup>ハ</sup>と<sup>モ</sup>理<sup>ト</sup>ま<sup>ハ</sup>け。音<sup>ト</sup>造<sup>ハ</sup>りて。云<sup>ハ</sup>く<sup>モ</sup>  
な<sup>モ</sup>く。皆私<sup>モ</sup>にて。卑<sup>シ</sup>限<sup>リ</sup>な<sup>モ</sup>と。や<sup>ハ</sup>シ<sup>ハ</sup>ベ<sup>シ</sup>な<sup>モ</sup>であ<sup>リ</sup>。や<sup>ハ</sup>  
此<sup>ノ</sup>の音<sup>ト</sup>。と<sup>モ</sup>付<sup>ハ</sup>て。云<sup>ハ</sup>う。突<sup>ツツ</sup>。撃<sup>ツキ</sup>。急<sup>ウツカム</sup>。居<sup>ツム</sup>。博<sup>ツク</sup>。採<sup>ツク</sup>。啄<sup>ツク</sup>。のれ。又<sup>ハ</sup>たの音<sup>ト</sup>。捲<sup>ツク</sup>。轉<sup>ツク</sup>。叩<sup>ツク</sup>。  
断<sup>ツク</sup>。沸<sup>ツク</sup>。等<sup>モ</sup>のれと合<sup>ハ</sup>。此段の出<sup>ハ</sup>。排<sup>ツツ</sup>。立<sup>ツツ</sup>。落<sup>ツツ</sup>。牙<sup>ツツ</sup>の<sup>ト</sup>法<sup>ハ</sup>きの<sup>モ</sup>と<sup>モ</sup>あらじ。

併<sup>ヒテ</sup>所<sup>シ</sup>後<sup>アフタ</sup>進<sup>ム</sup>退<sup>ム</sup>出<sup>ム</sup>入<sup>ム</sup>也<sup>シ</sup>あ<sup>リ</sup>。

草甘七段  
奴  
三  
奴

三  
二

ぬるいねえ

ぬ  
れ  
い  
れ  
し

第廿八段

卷之二

之  
之

卷之三

此より經の事也。音義をとれ世一段比經。經の傍々出。經疏の此段より舉べ。ソフ・コフ・オフ・タノフ・カウフ・カツフ。添。戀。生。調。存。數等の辯の中々。長經。數經。取經。もとは彼經の事と見て誰。

第廿九段

む  
な  
ど  
の  
む

たつひ

たのむれ

ま行の音ノナハ既上卷のレ部ノラニド。今之諱の一統ノ就てねハ。皆音  
ニ唇音ノテ。此五音と唱ニシ。唇の動く状物と如「卷」如「撮」如「回」如「色」  
ナリ。其詞ニ「卷」、「纏」、「結」、「約」、「親」、「巡」、「回」などあり。又下ニ附て「紡」、「摘」、「撮」、「抓」  
など云れ。多々也。是皆其唱ノ形。隨て取ナリ。此後の中「採」、「抓」の  
ニツヒ以て、其解を  
まと論。さば。かの音と唱ニシ。上下の唇の相合。形矣。即て物と採  
む時の。まづきと回。どうは故ニ。さて此辭と活うにて。縛。云など  
そぐの音。絲と  
引。あるれひ也。是より何事の上も。緘。詔。等。すのゆ。も云。それと皆口の形  
ふく。すと云ナシ。たゞハ下に附て。否。拒などハ。むの音に。口と閉て。うけづく  
形貌のあすり出。幅狭など。も。又是トウ出ナセ也。山高ニ月清ケな  
の活用也。こくに出せる。頬。脣。塗。眉。恨。覺など。の。音義。も。准。も。准。も。  
此辭の中。頬。塗。眉。恨など。ハ。彼。認。む。方也。脣。覺など。ハ。眼。の。言  
べし。此活用也。さて眼とめと云。と。此同行の。見。活きて。眼。以て。モ  
る。ゆ。と。覓。など。云。れ。と。推。せ  
ば。終。ス。皆。因。ミ。ト。落。ヅ。リ。

云の傳ニ。れハアヅ。たのむ。と。只。たのむ。と。たのむ。と。と。下の六段  
れ格也。他と。たのむ。と。たのむ。と。たのむ。と。と。此十段の格也。ま  
續。ほ。く。へ。い。る。沈。ち。づ。ひ。添。よ。す。な。く。も。回。此。お。な。所。ま。し。せ。く  
て。妙。し。は。ま。の。人。件。の。自。他。の。く。ら。め。と。わ。き。ま。い。ば。と。取。き。意。の。う。を。  
に。み。づ。く。れ。れ。と。人。と。れ。り。も。と。と。一。つ。も。の。じ。た。り。む。と。云。て。一。キ。ド。と。ね  
附。そ。た。の。引。く。い。す。ぐ。ひ。き。り。ご。テ。也。だ。う。り。る。と。云。ハ。万葉。に。今。憑。と。今。字  
を。添。書。て。人。と。一。れ。ま。り。と。な。れ。ば。ま。う。う。移。せ。く。異。な。り。又。紐。綻  
え。れ。ハ。我。ガ。頼。入。こ。う。れ。せ。と。た。の。む。た。の。り。は。り。ハ。こ。の。経。と。あり。  
人。令。我。れ。こ。う。せ。と。た。の。む。た。の。り。へ。一。レ。一。レ。と。あり。

第三十段

ゆきぬ

ゆきゆ

ゆれ

や行。喉音三行の中。最急速にて。列。き。音。か。と。す。上卷。や。の。部。よ

ひう。このゆそ。彼ノ箭射。弓越。避等の事。又伊行。得行而もみの一統  
も。行遣きの言となむ也。されば見。聞。榮消絶等と。こそゆく。まこと  
ゆく。さうゆく。たるゆくと云。てもゆるま。思。忍。うそと。ひそひす。まご  
やもと云て。そをとまさしゆるなり。

第廿一段

るなぐる

るくまく

あれかづるれ

此行の舌音ハ。彼ノ行の舌音とは異みて。舌の動きの和異なる。ま  
な行れ舌音と唱ふ。や相似。されば。音は體言と近似けゆく  
状と。ゆく。此アリルレロシ。又言の中間下等ニ附。まく。の句と。繰り返せる  
也。まゆも。らと。もと。も。わきそり。返るも。も。に。出せる。ゆく。も。流  
時雨。隱乱。憔悴。吹折等の。まく。も。まく。も。も。も。も。も。也。

第廿二段

うきう

うきう

あれまれ

此の音に。息。う。添加の義ある。又廿一段の得條。又廿八段のふ。條  
も出。其處と。え合。まば。られ植居等の。も。の。づ。く。ゆ。く。ほ。ぐ。し。  
食。と。云。人。飢。ひ。と。も。の。息。れ。こ。ほ。と。放。く。ち。や。か。く。ま。の。相。そ  
く。う。そ。義。を。な。く。る。又。恒。多。う。と。

二轉部

以上三十二段を。上段。紐渡。中段。紐渡。下段。紐鏡。と。各其受辭の。三轉  
入れ。も。右の。ゆ。し。されハ。言の切。續。き。此段まで。上段を。告切。  
ゆ。中段ハ。告。續。く。切。ど。也。已下十一段を。上段。も。い。後。と。中段。そ。や。り。との。結。  
一ツ。混。じ。て。下段。こ。と。其。精。と。も。れ。る。故。く。中段の。續。く。絶。し。切。く。ん。と。  
も。れ。ば。切。れ。も。も。也。もし。く。との。廿四段。も。三十二段。ま。その。クスツスマムエ  
ル。ウ。セ。九段。と。下三十三段。も。三十八段。ア。の。クスツスマル。の。六段。と。共。ふ

第三段

切る辭の下に置く言ふを。引き通音にて。継と同主也。  
そはごづるとアドロとの語也。例も合せ考べし。さて継ハ、凡て絶句の物と續くるにいへば、ヒモ又切れず、言を受て、自ラ續ば言とはなれぬやう。下士段も續く辭の下。又引などの下にも置く例也。是切れど続まじき也。  
切る辭の下に置く言ふを。若シモカレと心よくえまひて、續く言の下よ  
も置く例あり。ナミと思ひ混じて。既に春海、濱臣等も思ひ混じ。此項  
をもる訳ども。此々うちやと。ツユおもしりもうち  
れうれきこゆ。中段なるぬるさく等の下におうばんさくひくす  
なまくさくし。

くまきく

け  
ゆ  
け

此くの音義ハ上に廿四段を原くヒ條ヨ出ツ。こゝも言のとの方ハ大う相因じし。されハ此段の聞行鳴咲解續擧懸手向明の類と其辭うも互々相似ナリ。凡て此等の辭は上下二處ヨ出アリハ其

活き状の異なれ放をり。其差別を。こそその受けてよくもくる。上の懸明など  
は。この結局。かれあれとくどの一言から。とこの聞行は  
來と。きけ。ゆけと。けハくの言。直に換ひて。彼段の例は。やく。されとも。やく  
れも。りび。次々六段ともに。皆右の定也。此差と以て。何きの詩。ども准へ  
かひ。りびし。

此木の中。解と。従と。自他に依て。活きざまの異なれ。既に廿段に出。

第卅四段　そ のこせ  
うつそ

は。もし。との廿段の。そと。のを。なれど。を。活き状の。まも。との例のや。  
音の本義を。上の六段の。そと。の除。次に。处々。出。ち。の。歟。移。成。傍。支。  
宿。散。な。と。彼廿段の。住。寄。遣。瘦。載。失。奇の。活きと。相似り。

第卅五段　つたつ  
まつ

てたて  
てまで

は。ア。との廿六段。ヒ。と。ア。居。進退。所。作。云。後。も。と。活き状。と。依て。再  
び。も。と。也。音義ハ。廿段。そと。の除。も。との立。待。打。勝。持。分。壊。放。な。と。  
彼廿段。も。立。出。捨。愛。耻。懼。寺と。含めて。進退。依行。の。と。か。ぐ。し。  
右の中。立。と。云。辭の。両方に。出。も。と。自他に。依て。活きざま。す。れ。美。なる  
故也。既。廿六段。も。と。

第卅六段　ふ ひよ  
へ りへ

此。も。上の廿八段の。ふと。い。経の。義也。く。ヒ。言。思。達。習。厭。拂。添。  
今。な。と。彼。憲。添。生。訓。存。數。の。類と。云。の。と。ハ。同。く。て。何き。も。経の  
を。取。く。す。既。ヒ。彼。段。も。と。

第卅七段　むくむ  
めくめ

此。も。上の廿九段の。むく。音義を。よ。く。と。まれ。ば。う。の。汲。色。沈。住。悲。涼。

忌樂などと彼頼晦留恨覺等と因づむの言の押へ止ルとあつた。

以中。賴。自化。休。居。其。也。而。既。上。せ。九。段。出。

第廿八段

三  
考  
三

れ  
え  
れ

此るも上の三十一段たゞふると即ち考義を除き出さればさうの見おつ・寄反  
契・経・散・積などと彼ノ流隠乱時雨・悴・吹折等を言の活き狀のうれ  
シタルシムの事也。さうして之の事は又二回、さうした。

第廿九段

人  
もん

めまくら

せんとむと別な字ある。本居翁のん字のんも元字の音として古き  
假字ええんなど書キ又奇の句比首置てへもうどうええへんじらしき  
のええなど續けます。かくし。さればこそんとむと字の上ふ

100

卷之三

100

差ある。然るに只此段より下の、らんやん等の辞の格は、常のむとば  
異るゝ也。故に此段より下の言葉は、活きのまゝと接するに中古れど、  
へばさんも、へゆさんも、へまさんなどいふと、甲、乙、丙、丁の如くして、人を名づけ  
云々の會である。詩ともちう。本ハんとの二言の絶りて、その後さてたるし

後土

に幸い

卷之三

新知二

“

卷之三

七

卷之三

是即

卷之二

時為入室

人と將

スハれのとたま枝也。是等と常の草直なる。むやの幹と。ツツミ混じてよ  
ゆりふそ。

第四段 らんかくもん  
らんのうちよは、傍邊のとを含みたり。こぞらんとかるとの向と、らんとの間。  
さうざうのとをとられ一言よみて、續け奉れ候也。こそ上段云々へ、あゞぎんぐ  
ゑのまと、あゞぎんぐどトフジハ、たまち、ばれのまと、たまち、ばれ  
りもあや、かくも用ひてまえ、上の十二段。さうの際よりて、殆まのと  
ひて、其處に近づき、邊りづる形貌と見て、ほく、まく、成行くと、推シ  
量り、鋏ふ羽々をなむる也。かく、彼うち、ざうと、せらんとの差と、そと、彼うち、ざ  
き、おさづき、邊づる様子と、お量るのと、て行きあと疑ふまじのとがなす。  
そせらんと、人の一言、人とのとをあめねり、もくじけまの方へゆくをう。

まよひのへんべ  
成邊らんとく.  
八百萬も.  
思邊らんとくのを  
まよひのへんべ

十一段 けん ありえ  
けめ ちうくら  
きむのんへ来經の約ねよ也。來經と云。古事記の事。あらゐの年つま經れ。ハ  
あらゐの月を來經行。まことある是も。日月の過行間とつて。万葉とも。

八十六



万十二 欽ニア  
「さうすまへり。」  
「！即ち古の事也。其義を説き難む。或くてかく、せんじてかく、  
さうへども義を説き難む。たゞはるをよとててもあらび、中古以來ハ。  
甲、うんともして、用ひねば、稀に再び用ひられたり。なまくらあくせき、  
れどねがつゝ叶ひぬふらしあり。古今の事也。あくまでもうづふ  
さんす。かくくなあうけらまど、文を付すまをゆきゆき。皆本義  
統て、此取のべゆきゆきし。

三轉外辭

卷之二

十七徒ぞや何

行

行

きりへばとてすうにひらめくもればよかうもとつもんてかへりあら  
ぬひづれどもの中にうけべれおきへせうかにすみてまごとのへだち  
まひ安よ妄説エセゴトとまれる。すゞ又アハ的めアハてあり。そうりきの  
うち。耳疎アラカニきりみてきて。人承ヒシテこもるに却て妄説エサナゴトのそれゆく  
ときもくらむと。せんじぐとまきとみられ。守部シマツうみのすゝも普通の  
説アハく聞劣アラカニて。耳疎アラカニきりのまうれ。わきなはとそがくが。  
やまはれ道とまく。アハとせんとまくと。いざうせつて  
らりてものしぐき。てに彼ヒんうーのゆうひづれと。先サキヤマヘん。此  
まヒ。及語ユミ一やヒとカる。时ハ。ゆく。辭ハセバと活ハセバき。  
ハヒの格ハタチれども。元來ハ續ハシきもそろ辭ハセバと活ハセバき。  
かカいばとも。まヒめとと繕ハシけえと。彼ヒんうー。まヒうー。なヒうー。ハ  
切ハセバと活ハセバ。かカいだと活ハセバ。アホと活ハセバ。アホと活ハセバ。例

まし。是ヒー。摠て切ハセバと活ハセバ。也。此等のくらうとヒたきヒで。ソラの  
いうじそん引ハセバく。うそヒー。アハときヒく。也。かカくこくに。おオの角ヒ  
さヒとカかカて。此言の意を。次ハ解ハシべ。此格を。玉の結ハシ。三卷ミツモンの部ヒ  
出ハシせれど。そ其處ヒ舉ハシん。秋の費ハセバ。也。アキヤウナヒ。ツヒ合ハシせく  
くヒはカくカ。

古十五  
人ヒ「ヨリ度ハセバまかねヒー。アハとぎヒく。もなまきヒく。」ヒたヒよヒのと  
後ハ二  
山ヒ「ヒまくヒてヒらヒく。アハとぎヒく。もにかヒまくヒてヒらヒく。」ヒだ

後ハ十六  
新古十九  
人ヒ「アハとぎヒく。もなまきヒく。アハとぎヒく。」ヒまくヒてヒらヒく。アハとぎヒく。も  
けヒまくヒてヒらヒく。アハとぎヒく。」ヒまくヒてヒらヒく。アハとぎヒく。も



又云云爲んと爲と同言の爲と再ヒシテ。向ソドモ也。彼漢文の訓也。古  
きよみまし。かほ古語の盛也。ナシセヨ。訓傳アリモう。遠き事も遺ケル  
モ也。万葉十八卷長哥。ハスキア。モ妻の子と翁也。モ有ます。ト  
ちも歎き。カフリイホ。ミニ又三卷长守。ハカミリ。シムカの通と。モミ  
ク。ゆくやん人のもじへば。通ひりよ。モ、云えども。ハキ  
トシ。通アリ。モムシテ。モク。 三鷦鷯部。セモ殿に云ハラゲガト。一。  
ま。ませ。まも。モ。因縁れ活用する事。モ。明ラク。うれ。今セまくと。  
将字コアメテ。粒書アリテ。諭キダ。ベキナ。見将為。ベキナ。聞将為。イ  
モナ。言将為。セキナ。第将為。ベキナ。傳将為。ハモナ。思将  
為。セシ。往将為。ベキナ。蓋将為のをナシ。

○まい

○まつ

引此受辭

十一

上巻と繋がれどその結の一つハ過去の辭アリ。去既の義ナシナ。既ヨ  
其條ヨリテテ。モはヤリ。前段セガヤリ。ハタツモナシナ。サリツキ  
マリと曰く。ハタク在キト。モ付ニムアリセバ。ハタツモナシナ。サリツキ  
悔て云々の終也。ミトモの結。彼去既の事つと。一ツ又舉て。ナシナ。サリツキ

赤染集

北郭より所をりづくわ。さればこの赤塗の寺を、  
アーチス、アーチス  
のと。金葉をもよそ。へきう將為づれのと。千載をもよそ。在將為づれ乃  
主モ

切忌下批指辭

う。彼の義。ちへ其。然。たゞ云。そ。その通音。と。ぞのま。毛。絆。と。しゆ。  
ほ。ど。也。古事記下巻の寺に。ハ。云。鳥草樹。斯。督。斯。多。途。萬葉十二長。哥。に。  
仲枝爾。伊加流。我懸。云。己。之。母。字。取。久。乎。不。知。己。之。父。字。取。久。乎。思。良。尔。云。  
是。己。字。と。填。る。也。其。時。又。指。セ。物。生。物。又。  
シ。可。し。故。也。本。ト。己。字。又。當。れ。る。言。フ。ハ。あ。ら。ば。  
其。の。を。也。され。ハ。此。辭。も。毎。七。云。竟。て。切。れ。る。語。の。下。又。附。る。例。も。既。上。と。指。  
て。彼。其。と。ソ。シ。づ。如。く。用。ひ。り。文。は。恒。多。う。り。奇。も。し。

九十四

後拾三

はぐくの唐と高みをもぐくもみとほりにもやもまれる  
拾十九  
ひづれむにけり。ばうす。まきよ。う。う。  
はかよ。へんとく。」。へま。う。へんとく。う。  
まくひて。今まること。ま  
まくひて。今まること。ま

०५१

## 摠て凡指辯の受

卷三

1

「おまえさうだね。」  
「おまえさうだね。」  
「おまえさうだね。」

後五  
のひをひそめて立田ひも引く秋光ひも引く

此に限らず。もとぞやのまゝ。可の精洋とも。受と交わ。

トクベラシ  
ツモルベラシ

キヌベラシ。肖せ魯茅をのとく。もよもよ

レ行はきの。セラレニス。ヒトハシマリ。アラシ。アラシ。

種ハナウチにイヌヤウチな  
くも(の)を(の)シテモ(の)モ(の)

説ふる者である。かくもんの事は已れ。

カニモトタクマ  
五葉の花の書

カレニス

彼其と協同する也凡ては  
まわる所れどもむしに

の言ひ方をうなづく世の俗言も、早々来不其サア來テ見ヨ其サア。

などをうめり。ひづれ河の匂ひも。是と今せき甚しきとせんじ

摠て凡指揮の受

此ちよ。やう。べらのきれ合めます。既に三枚部四十段。らんの條もつまう。

ちハ。ものも古より万葉等にうきとよひふうあるもの。たのう

「おまえの心が、どうしてこんなに悲しきものになつた？」

蒙古語彙

蒙古文

○

總て凡指辭の受



の々ハ來經の約れる所て來經まくをりムと來經と  
とモ、いづれにこそハあれ是と曰一トキテモ、決定の辯ヒトトツ  
トモ、もろもろかづなきも、本居翁もどの人言語のよきも  
きくがゆすにまづき近ドモ多ニモアヤハシキと又弁よし人のかきとも  
こわし、よづきゆきゆきめし。さて此來經の事、又將マクハ、過去スモ  
ユ見留ズ心ユ極ラギム。前未來シモ、未タ日、前  
ムの上附て、え、おとばせ等の本義の事、ども上出テ、  
の事も、又上なると一ツナレバ、と省ク。

ちに冬照りやあやかねざきありててんをはく用の詞もひとそ  
ほくの教とづきの書スル他の辞のよき。まもつて。此彼、八  
八。まくの三つひと何のゆき。されの及など。せし  
たまふと。あく。うかく。ひく。いふ。説カハ  
ヒトモテ

今ノ役二三

まく歌ふと云ひば、のうち解るむべきか。百千の中  
ヨロ二三十言のとと新しくて何のひらかんともりゆきれく。  
ねうらば、なつうたも、うとうやううと、ほやさうも。  
ノリの例二三

歌古三

けうよそえまふくし「うへれ衣ほしてよ天け、うる山」  
此のとと。新古今ユ載られ。ナツキ=キフ  
上ふ就て云なり。春う過て。夏来去来経らのと也。  
去とうりて。まくへ來るすともうす。是も既マツクも。

あとましとす。されまとくわくとばくもむきにく。も。

いうのうへくあひ枝うびくきくとちぬまとくらうくべぐ。も。

かくよも音の歌息とまく。あもう。八木にく。ハ置去  
キフナ・歌のとへく。ハ寄可来経もニアのと也。此外ちう

・ヘトリニキフ  
・ヘアリヨキフ  
にテ散去來經ル。ナリカミテ  
ニテ尔在來經ル也。又ミミの文

古漢

一一一  
毛氏受寧

つまし舌音みて此音と唱ふた物と約め圓むる貌のあらうと圓き物と  
指てつゝ一統あり。こそ彼三卦部廿六段の言とハ其音の統異なるも  
圓甲螺子蝶壺頭榦筒ナシのれど圓うもくらへ也又旋風ナシモ  
回る状。田うねる音ありかくて圓き物を一々離々くまづく。即テ離々な  
る音と八ツノトモムヒ。又八ツノトモムヒニツノトモムヒ。又ヘツダ・ツダ  
ヘツダ・ツダヘツダ・ツダヘツダ・ツダヘツダ・ツダヘツダ

古一  
山ノシハアラタニシルモ立ツヘキ  
ヒテム。ハキモ立ツ。トカクモジトヘ  
カツ。シテカツヘシモ下ツ。ハシトカツ  
シテシテ。シテシテ。シテシテ。

もとの主の食ふぢやう。

ちつへくべ? とやうよ。うゆどもの。ナハ表カタあらもれで。只上  
と短く。下と長くよみませるのみせ。うひな。正。  
けくをちりゆくと限りとねりへば。かづのふき。す。ゆゑよ。おも  
せ。かくよ也。此ちのつとも。箇限と奉られ。まきまき。まきまき。ま  
て。一ツもうちへまくち。

日土  
後四  
はくはくわくまつてあふたみの間せんかとよすま  
うめきもくがくまくのとくせんてせねの山うれ  
せれと。ぬくとえ。山よりとくら。是もちくちくまで。巣をま  
す。うを。ぬくふきつ。ひくつ。とくくとくくを。つりとくくゆ  
て。せくくくく。後援よき。へ戻りびとゆくとくくと  
そくへくとくくとくくを。つりとゆくとくくを。彼なぐと  
え。書紀万葉等。隨字と書て。さのまくのとまれば。アヒト

元より別れど、此にて、彼もつてよき。用ひてよき。されど、  
うへ候るも、うへし。只適相に、うへてよき。されば、是はあれ  
うちより、うへと、うへとあるれど、もつ物の、紙と、り葉等と、へうへ  
え、下字と書ふと、燈とて、それとての本つとの、うへたをもと。  
うへ俗字也。彼字も、そぞの、人せ、上と、えきて、書ふたあふ。字書  
フ。下字の注、勿也。又急字は注、た也。元々本を、數起、於一、ある  
をと取て、ちるなれば、そぞふと、えきて、あれ。此外、候り。く  
れの、つとて、箇候の、あむと、うへて、早毛と、ちつと、晴きを也。  
悉く本の、もと、えして、かねが、かへり、かわらで、すみ。うへ  
を、耳疎き、あらめくとも、ぐく方と、かく方と、かくやべ、ざく、安く、え  
ゆく。益をねらすと、かくやべ、さく。

## 〇うへ

ひと徒せ受辭

う行け音とは、歎感斬刻痴碎鑑剖消蕉立殺芋の刺  
鑿ら身もろくて、痛ききのももも。何やうれず、よほくをひくと。  
うとうじ、られーと云。られーは、おの上の、もと、ト畧りて、詳くい  
歎息の声也。此外、うへし。ちへがあましの義也。おまハ痛耶など云。  
ゆきなどのれも、准ふべし。即うの辞も、悲哀れうと、因をなす。さ  
きに、哉のきと、うのと、もも。それも君の義あれば、歎息のきと申  
こく也。うへし。せよ所謂、吹あぐのうれなぐのうれ。うれの経と、參  
く漢典とあらうとす。大うれせきのうれを、せすまてうれべ  
うれば、すと者うり。

古ニ

待人を、おもひゆゑう、ひものちつて、もと、うへて、うへて

回十三

まづまづと人を殺せりあひきこえ

まつりあらわすかあうれあとほひきよ

はおとすあらわしをあれと見てまちる格のまこと

と自ら腰にさしかかる別室には必ずそぞろの経

左の如くは極まるに悲哀にされ送憾よりあれ竟美にされを有す

身の方へ就て之難也山事にてても彼ノモロコシと  
此後悔・悲・哀等比肩の如くに

ト等一、取ておきなう  
就て分ゝば、限りもなうるべし。

後  
ジ+  
シ、  
一  
か  
う  
こ  
く  
2.  
21

レキタの事も  
18の事に鼻  
アレルギーをう  
アレルギー性の  
アレルギー性の

たゞかくと御子をうへと葉をひびきを顯の事とせし

•

いふが、御主とおゆまゆあす。

集

مَنْ يَرْجُو دُنْيَا

みうな等のふきもとをめぐらす

世宗憲皇帝十三年正月  
新刻十八八

新來一ノ事多々不経意  
青之子也。此也。

百一

うまきあす。徃のまきあす。ともへへ。弓を退きの弓をもと。引く  
續く。対を。現在。行まうとうやく。用ひは。こまく。こまくを多く  
いきゆく。成盡ん後。や。越え云放也。今之言ふ。何トソ此事ノ成  
就セニ時。早ナリ徃カレ。ちとまくと申ぞく也。むくと昔より。ばらまきの弓  
と云て。けまのすと云歌をちく。歌をもとみまく。ぢかして。まくちく。  
右の弓がれと。弓が。弓がと。弓がと。弓がと。弓がと。弓がと。弓がと。弓がと。  
こまきと。弓を。うとのつづきと。固例也。かの弓をすまぐ。得りど。  
秋の弓。弓を。弓を。弓を。弓を。弓を。弓を。弓を。弓を。弓を。弓を。  
金三  
秋の弓。弓を。弓を。弓を。弓を。弓を。弓を。弓を。弓を。弓を。弓を。  
けり。まよ。去のまあれ。おほく。盡て。おれのまと。申す也。是と  
清て。とも。は。おの。舞也。  
古ニト

えふとさやまもやうづくわゆるやまとの中  
万十一ミハテ！  
よし後そりうごよはよあんも。よきよれ縋るよきよれは  
よのう。うも右のよのうのよと有りて。四、五、六、八  
見盡ミハテ。それのとちよ。よきよれは。

指揮要辭兼用

こそ上巻のやうまことに。指揮部へ入るも、もとよりれど既に初稿などて。  
もも徒ぐのやらしもとづいて、背りしもとづけむら次第也。  
かくは、もやしの如く、よしにせば、出でゆる也。

かの言の如く、カニカ・カラケキ・カスム・カモル・カクル・キル・キラフ・キユ・クモル・シヌ・コモル、幽、蒙朧、霞、陰、隱、霧、霧靄、消、曇、闇、籠、  
きの一統として、もとし物の髣髴として、定うる所すら、生ずる也。又は  
うとけし物として、怪、恠、異、氣、物のけ、もあつても、あつても、疑ひきゆゑ、又曰  
の下に附し、ちやうげ、八びくよし、八びく、なげ、八びくとも、其形貌



拾二

一  
あくねぎを  
さわやかに  
さつきの日  
の江の家  
へ  
まよひと  
やまとと  
結びと  
ふ結びと  
よしと  
ぞ行け  
うの紳の  
よもや  
一とき  
いと  
下へ  
おきと  
がよ  
ましと  
きてと  
とへ  
け

日五  
門十三  
秋ノセのあきやくもとるも菊ハ花うあねうはのうすう。  
あやくわやゆうへんはまをそきつう。うねてつまう。  
えくすまう。絆びとあくち切うまくも本下え能ひ酒  
ちくわむちく。

### おほのう

けううハも當り激てえ、だくや・や・かと角。既上巻。や  
部々委くじられば、あくはあく。彼時と相照して考ふし。

古十七  
後十六  
かくまくさり、きまく。『ちはやづかりのやうせうばまん  
古二  
こくまくさり、やうじとてせとてびく。』  
日十二  
人くまくさり。『あくまくたまきたまくはくとまくはく

日二十

アキアリハのひれやくもとく人の、ごくわざくらう。も  
くみす、おぎたくもとくあくまくのり。老れ、いそ、くまく。老  
と笑ひ、くまく。激て答へまく。次く、くまく止り、くまく  
止。止まくてほのまくとくと。かくまく。激て、くまく。次く  
も、是く、准く、くまく。かくまく。止まくとくと。くまく。  
因とくまく。このやと、やとく。くまく。くまく。くまく。  
まくや、おきくとくやくまく。やくまく。くまく。例とくとく。ハ、切  
みくのく。きく。くまく。くまく。くまく。くまく。くまく。  
もく。くまく。くまく。くまく。足、やハと、くまく。くまく。くまく。  
信て、くまく。くまく。くまく。くまく。くまく。くまく。くまく。  
のれ、くまく。くまく。くまく。くまく。くまく。くまく。くまく。

○「たゞまつたれば、さうもとあるき。」

○「古」

けうふ言靈の  
きく(天降)  
そどより  
てみを傳説  
もすてよし  
て說

月二十  
トモヒルのあくのひなじんと人とやくづぶらぐ  
此處のふきり事とへうづぐ兼きくも兼ねまくふ  
圓満にてみえねの物うきせりと。うきに二言の絶れまつて  
兼専のとたまぐ。兼とと。ひこおは後うねきくまづく。兼てそ  
諸よ。まくの言なれば。世の言。其駕専と。之を用意候  
云譯(ウツ)してちぬ。まくと。まくと。まくと。まくと。鳴並専をも。かくま  
駕がまくと。まくと。まくと。まくと。まくと。鳴並専をも。かくま  
うやれバ。もとと。かくし。まくと。うやのれを。かくのれを。

## 變格

多め。變格と云ふと。本書本義考に。詳く弁づれ。其  
辨長られば。ちくは得引と。ひもたせと。極くいと。摩丁生  
せすと。告結の下。かま。よきの改憲と。令もと。まくと。  
そすのと。まくの聲と。ひもと。まくと。叶ひ。まくと。まくと。  
まくと。留るし。又れてにまくの定と。變格と。ひと。傍へ  
まくと。初まのま。もう留るを。格と。まくと。まくと。ま  
やまくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。  
と留ざまくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。ま  
まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。ま  
とまくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。まくと。

まゝ。詩律うつて。八代集は年少。かゞ三十首。主とす。  
是處にて。手本の如き。多く。是處にて。手本の如き。多く。  
そぞり。よひ。され。て。手本。す。どく。ひき。て。手本。を。ほまれ。年ど  
も。多く。て。やく。と。物の格。うち。かく。之。考究。れ。す。と。され。  
多く。統。い。の。格。以外。言。辭。と。考。え。ま。と。会。ひ。れ。と。変。格。と。せ。ば。彼  
へ。かく。やう。て。一。句。ひ。ま。へ。ば。と。一。句。あ。や。あ。ま。せ。ば。  
ハ。だ。ハ。だ。等。ま。と。い。る。あ。ま。を。も。ぞ。こ。そ。な。が。う。と。絆。び。と  
ち。ま。と。金。ら。う。て。ま。と。お。き。ば。と。め。改。て。手。本。へ。あ。ま。の。り。へ。も  
す。ど。ひ。と。行。ま。く。變。格。う。と。が。と。彼。も。の。せ。し。之。物。部。ま。う。物。卷  
一。ま。う。と。二。卷。ま。う。五。卷。迄。小。舉。ま。う。と。う。と。う。と。う。と。う。と。云  
ま。う。回。転。ま。う。其。正。格。と。せ。ま。う。と。う。と。う。と。う。と。う。と。云

○何大可

ひそひごとく。次引へば、さういふ事もあら。さうまで  
まわるが、うれしく、能まと切て言つて、結びた。されど、何のな  
まことや。さうば、遊の細といふを教つて、おととハ、結びて、え  
う。まことにあつてゐるの、うち、引と錢<sup>ヒ</sup>をまきて、忙く、駆け足とれ  
きよ。ひと重えたり。重き方を奪ひて、結めたり。も欲まゝと  
きつやしとの、やうゆうが。そもそも、あつたの、ゆゑに、元て、年む  
せられ、もとまつても、姑くたのす。どうか、傍よかへて、と、もとと  
考へて。

也

後  
拾十七  
梅○ラン

此事より始て、やうやくとあると、而して、摂集をせりんべども、  
偏て、上の支松の条々ハ。  
1. 此事ハ又、いゝく、傍らなる物ニ云ふよせる。前後齋吾にて、亨リガ  
シテ、拵集ハ、さう一うとかふとは、摂者達と指セラ。若くら  
ば、世々の摂者とて、ことは、定ミシテ、かねもの、小之、よせらるて、  
いとたやモ、げき。又後、れ人の手と指ス。さてし、勅摶れ  
集と、誰う私ニ、必う改り直し人あらん。うれバ、摂者と指シヘ  
ラ也。古への摂者一人コ。て、ことへちらで、やまれ、アラベ  
キ、うれ、よし。ひとも、あらへ、アレ右。左にかく、よく、往く下よ。  
引と云の、もと、されば、元モリ。アラヒとまく、受、ごくまく、うまく、右の

は二  
は拾五  
ひりうれをものとく  
ひあとの月をもふも  
ひきわのうとゆくもんせ。生不<sup>な</sup>死<sup>な</sup>まや。か  
ひきわ。と有<sup>な</sup>

の格と相向て立ぐ。右の外へ出でざるを准則とする。

卷之三

後七  
後拾十五  
そぞく。か月とや。そぞく。まとそぞく。月とハソク。モモヤリ。  
せおも。ハソク。モモヤリ。と。間ヒナレハ。あうそと。  
あくよ。玉佐日記。ハソク。モモヤリ。のちはと。ざれ。モモヤリ。  
まつ毛。ハソク。モモヤリ。因。モモヤリ。因。モモヤリ。  
や。ハソク。モモヤリ。聲也。歌鳥。呼。モモヤリ。一。謡格。モモヤリ。改。モ  
上巻。部。又。錦。の下。合。モモヤリ。た。の。後。玉。紙。ハ。二。卷。十三。葉。  
よ。正。十四。葉。まで。

○  
云



き多うれし。まことに。かくぞれ。とく。ともかく。  
ともかく。すまのむらひも。既にさげり。ほゞよし。  
おもむく。なう。とく。すま。とく。とく。  
すま。せんぐ。うそ。神と。やし。の道。いき。確  
とほく。うそ。あ。うそ。と。かづ。り。が。と。

天保九年正月

天保九年戊戌仲春發兌

京都寺町通松原下ル

大坂心齋橋通勝村治右衛門

江戸芝神明町秋田屋太右衛門

同石町十軒店英嘉

同中橋廣小路西宮彌兵衛

同日本橋通二丁目山城屋佐兵衛

同同町小林新兵衛

同淺草茅原通一丁目原屋茂兵衛

同通四町須原伊助八

三都書林

